

資料紹介

大西家蔵番外謡本

(六)

西畑実

景季 現在藤

次第へ春待兼て咲梅の、く、花垣いさやかこはん 詞「是ハ撰州
生田の辺りに住居する僧にて、我庭前に一木の梅を持候が、当春も
盛に成りて候、又爰に難儀成事の候、当国一の谷に平家の一門楯籠
給ふにより、源氏の大勢取り、明々日合戦有へき由にて候、さ候ハ
討もらされの士卒当地へも乱入りて、狼籍成事も有へく候間、所
の人を頼み寺中を守らせ、又ハ秘蔵の梅花を圍ハせハやと存候、所
一セイ上へ梓弓、春の野山を尋ぬれハ、袖に乱るゝ、花の雪かな サシ
抑是ハ東国の住人、梶原源太景季とハ我事也、詞「扱も今シ度の
一戦、源平の晴にて候間、一陣に進みて高名せハやと存候、又陣中
の際にて候間、辺りの名所を尋見申せハ、故有げ成ル梅イ花の候、や、
思ひ付たる事の候、此花を一枝折はやと思ひ候、ワキ「なふく

暫、其花な折給ひそ、シテ「落花狼籍御免候へ、ワキ「いや落花狼
籍とハ申ながら、妙成花の陰に寄て、手折心ハ情なし、所望ならハ
初より、など主にハ乞給ハぬそ、シテ「実、是ハ誤りたり、更ハ一
枝たまハリ候へ、ワキ「花をしむとハなけれ共、故有人と見申せハ、
子細を聞て此花を、參らす事叶ふまし、包ます其名を名乗給へ
シテ「誠に誑しきお僧かな、惜むも折も花心、岩木ならねバいで
さらハ、我カ名を名乗申へし、花を免して給ハらんや、ワキ「中この
事名乗給ハ、花をハ惜み申まし、シテ「さらハつゝます名乗候へし、
是ハ梶原源太景季にて候、ワキ「扱ハ景季殿にて座すか是ハ名に
おふ弓取也、東国武士ハ明暮に弓馬を社ハ励み候へ、かゝる誑しき
花心の、二枝を所望有ル、情の程そ有難き、扱此花を折りてハ御覽ぜん
為候か、又ハ何とぞ御身の事に召れ候やらん、シテ「さん候此度の
戦ひ、源氏の晴業にて候へハ、此景季も先陣に進みて名を揚ハや

と思ふにより、梅イ花を折て、簾シデにさゝバ名乗すとても勝カワイイ色を見する梢コメネの梅の花、先懸ぬると人やいふらん、ワキカ、ルハ実こそハ理りなり、さしも誑ウソしき人心を、しらでぞ花ハ惜ウレミぬれ、とくく手折給ふへしと、かこひを免し申けれハ、シテ上ハ景季立寄折ル梅の、上向ハ花の木陰に立よれハ、く、それからあらぬか散花の、空にしられず降かゝる着更衣の雪ハおもしろや、一ツ花開けてハ、四方の春しる梅か枝の、折得て匂ふ此枝を、鑑ヨロイに指ハ其儘に花簾とやいふらん、ワキ詞「如何に申候、景季にて御座さバ、此度の源平備への分野、また城、郭の様、躰御物語有つて御聞せ候へシテ「心得申候、ッリ地へ去程に平家ハ去年播磨の室山、備中の水嶋二ヶ度の合戦にうちかつて、山陽道南海道、合せて十四ヶ国の兵、都合十万余騎、津の国一の谷にそ籠りける、サシハ東は生田の森、西は一谷をかきつて、其あひ三里かほとハミちくたり、上向ハ浦とにハ数千艘の船をうかへ、陸にハ赤旗いくらも立ならへ、春風になひき天にひるかへる有様、ミやう火雲を焼かと思見たり、シテ下ハ惣して此城の、前海後は山、向ハ左は須磨石ハ明石の、とよりかくより行かふ舟の、ともねの千鳥も声となり、クセハ時しも如月上旬の空の事なれハ、須磨の若木の桜もまた咲かぬる薄雪のさえかへる浪爰許に、生田のおのつからさかりを得て、勝色見する梅かえ一花ひらけてハ天下の春よと、軍の門出をいはふ心の花もさきかけぬ、去程に味方の勢、六万余騎を二手にわけ、範頼義経の、追手からめての、海山かけて須磨の浦、四方をかこみておしよする、シテ上ハ魚鱗鶴駕もかくはかり、向ハうしろの山松にむれいるハ、残りの雪の

しろたえにねくらをたゝむまなつるの、翅をつらぬるそのけしき、雲にたくへておひたし、浦には海人さまく、の漁父の船影数見え、いさりたく火もかけるふや、嵐も波も須磨のうら、野にも山にもこぎよする兵船ハさなから海士のとり船もかくやらん、上ロキ地へ実や委しき物語、聞につけても浅からぬ武、士の道そ絶もなき、シテ上ハ名残ハよ御僧帰るなり、仮初なからは迎も花の縁と思しめせ、地上ハ名残ハ友に有明の、つきぬ契りの深ミ草、シテ上ハ葉末の露と成ならハなき跡とハせ給ふへし、シテ上ハ是迄なりと夕陰の、鳥もなき鐘もなり、同上ハ東、雲も明行や、霞と友に手束弓、頓て参らんさらハとて、本陣に帰りけり本陣さして帰りけり、中人早鼓、景時詞「いかに景季ハ敵の陳に入りしか見えすとや、荒不便や、扱ハ討れて有けに候、惣して此景時が戰場に望んで身命を惜まず、骨を砕くも子共の為、景季討せし無念さよ、平次ハなきか今一度、景季討かうむを尋て見ん、上ハつゝけや家の子若党とて、上向ハ梶原親子五百余騎、く、轡をならへためらハす城々中さして切て入、シテ上ハ抑是ハ、鎌倉の権五郎景政に五代の後胤、梶原平三景時なり、上向ハつゝいて名乗ハ平次景高、三郎景持其外家の子、与力の兵切ッ先を揃面もふらす、乱れ合て戦ふたり、ハタラキ、後シテ上ハ先掛て、勝色見よや梅の花、色香にめつる、気色かな、詞「梶原景季爰にありと、大音、声にて名乗けれハ、上向ハ父の景時弟の平次、大きに悦ひ大勢の、敵を懸破りく、て、源太に廻り逢ふ、運の程こそ目出度けれ、平家の兵是を見て、く、我もく、と責寄けれ共平三源太に逢ハうとん花と悦の勝、闘カチいやと勢を揚、親子三騎火水に

なれと懸立^{カケタテ}追まハし、おほくの敵を四方へ追込み、いざうれ景季
是迄とて、味方の陣へ引退きし、梶原父子が手並^{テナミ}の程を、感^{カン}せぬ者
こそなかりけれ ほめぬトモ

黒池龍神

次第へ普く照す日の本や、く、曇らぬ御代をあふくなり 男詞「是ハ
尾州の傍に住者にて候、扱も此比天下大旱^{ウツク}、古今稀なる次第
とて、国々の高僧貴僧所々の靈社にて、大法^{ダイホウ}秘法を尽し、雨乞^{アメゴイ}をな
し給へ共更に其しるしなく、草木も枯果^{カレ}人々民々の歎き此時なり、
又此所に快^{クハク}、岩と申善知識のましますを頼奉り、雨乞を仕らハヤ
と存候、いかに和尚へ申上候、ワキ「何事にて候ぞ、男「卒爾成申
事にて候へ共、此比の早魃世にためしなく覚候間、雨乞を頼奉り候
ワキ「実く仰尤にて候へ共、天道の^{マツゴト}政、はかりかたふこそ候へ
去ながら、衆生済度の為なれハ、寺田の面に池を堀、小嶋を築て官を
立、天天下の龍神を勧請し、則龍天と名付奉り、上カ、ルへ仏法の
守護神と、未代迄も尊^{タツ}ミ申へしと、上向へ所ハ此坪の、く、名
にしおひたる花の色、桔梗^{カルカヤ}、萱女郎花、花の小車廻りあふ、龍女
の朝白なでしこの、玉葛なかき世に、妙成法の蓮の、花の台^{ウツナ}の縁
となる、照日の数ハ常夏^{トコト}の、百日紅と花てる日、猶しもけふハ照ま
さる、よき折からと思ひ立チ是よりも東に、高田の黒池へ早立出る、
けしきかなく、ワキ上哥へ我草庵を立出て、く、生田の橋を見渡

せハ、遠目にかゝる小牧山、ふりさけミれハ高田寺の、南無や薬師
を礼しつゝ、北の片場ハ青山や稲葉の野辺に立煙、心ほそしと夕立
や猶ふりかたき、気色哉く、下へ神の誓ひのたかハすハ、けふ雨
にあふの木の川をふたこの堤^{ツツミ}、かな、南ハ蓬萊宮の杜、海漫ことし
て、浪のおハリもしつかなる、世渡る蚕の釣小舟、さしくる塩にま
かせつゝ、近く鳴海の、法の道く、詞「急候程に、早黒池に着て
候、其時僧ハ池の汀^{ツツミ}に立寄、大音^{オホネ}声にて龍神を三声呼、いかに
黒池の主八大龍王、悉くの龍神、日比の契約をたかへすハ、則時
に雨を降せつゝ、人々民々の愁を助くへし、それ一大事因縁の金文、
龍王授^{ユツ}戒を池になけ入、詞「汝よく護持せよ、釈尊よりも受つぐ
法に、正しく汝を仏弟子となし、菩薩戒^{ボサツ}を授けつゝ、上カ、ルへ奇特
を見せしめ給へとて、かんだんをくたき祈りしかハ、詞「ふしきや
老人一人忽然と来る、そも汝ハいか成者ぞ、シテ「我ハ此あたりに
住翁成か、けふの御法の有難さに、聴聞の為に来りたり、迎の御事
に、我に一句をしめしつゝ、悟りの道を^{ウチヘ}教てたへ、ワキ「夫我宗
ハ教別別^{ケツ}ッにして、云もいはれず説もとかれず、我と見吾と知をこ
そ、悟りの道と云へけれ、シテ上カ、ルへ有難や仏も自證し、悉有仏性
と説給へハ、ワキへ仏も、シテへ衆生も、ワキへ隔なき、上向へ夕への
煙朝霞皆是、三界唯心の、ことハリなりとする時は、有かたや頼も
しや、クリ地へ夫天人所戴仰、龍神咸恭敬と、仏も是を、説たまふ
サシへ一樹の陰一河の流れ、皆是他生の縁とかや、同へ況や師弟
と成事ハ、生と世との縁ふかき心の海の法の船、身を浮^{ウカ}へき、有
難さよ、クセへされハ六道に、廻る車ハ生死の二つを輪として、十

二の繼にひかれて、悪道に流転して、業障の雲あつづく、真如の月ハ晴やらす、然れ共、一念不生成時ハ、罪業ハ則消滅すると聞なれハ何かハ罪の種ならん 上へ身ハ池水の浮草の、同へ根も定めなきあた浪の、よる昼のくるしミ、三熱のはのほの火宅のうちを出やらで五濁の淵に住居して、くるしき浪のうつせ貝、やるせなき身の行衛彼岸にいつかいたらん シテ詞「かゝる御法に逢奉る事、盲龜の浮木うとん花の、花待得たる我心、此報恩にいざさらハ、上カ、ルへ誠の姿を顕して 上同へ大龍小龍伴、たちまち雨をふらさんと、夕雲さかく池の浪、けたてくゝて、失にけりくゝ、ワキ上へふしきや俄に風立て、雲の気色も冷じく、浪立さかく池の面震動するこそ奇特なれ 後シテへ抑是ハ、黒池に住して国土を守る、大龍王トハ我事也 上同へその外八龍池浪に浮ひ、くゝ、黒雲おほひ、神鳴稲妻大雨をふらし、五穀成就の、時とかや ハタラキ シテ下へ龍王弥法味を受けて、下同へくゝ見性成仏の身を顕し、南方無垢の空行雲も、風治りて、くゝ、もとの空とそなりにける。

一言主

次第へ野に伏山に臥馴て、くゝ、猶嶺わくる袂かな ワキ詞「是ハ諸国行脚の山伏にて候、我別行の子細あれハ、葛城山に分入、暫行ひ申さハやと存候 道行へ余処のミ見てややミなん葛城の、くゝ、高天の山の朝霞、たつや弥生の末なれハまだ色残す遅桜、青葉がち成木の本ハ、見るに心も晴ぬらんくゝ シテサレへ夫山は塵高積つ

て高根と成、たうくゝとして又深じたる幽谷の、下津岩根の苔衣、着馴て山を狩ふよ 下哥へ見渡せハ四方の桜も移ろひて 上哥へ昨日迄風をいとひし木の下も、くゝ、けふハ昔の山桜、花の色香も散過て繁り行なり青緑、木の間を過る夕日影、傾く草茂みゆふ、鹿子の跡をとゞめんくゝ ワキ詞「いかに是成人に尋へき事の候 シテ」何事にて候そ ワキ「さん候は別行の事有つて当山に行ふ山伏にて候か、見申せば狩人に見へたり、呑も当山は、役の優婆塞踏初給ひしより靈地となつて、有情非情も悉く解脱すへき所に、殺生の人ハ不審に候よ シテ「懇に問せ給ふもの哉、夫人類の品とていつは、国土に四民を分ち置て、其外に勤むるを遊民とせり、其遊民とハ作らず織ず暖に着て飽まで食す、されは御身の様成人ハ捨身を勤めて身をたてたり、我等ハ又此狩業をもつて身をおくる、たとひいか成靈地にもせよ、通ひ馴たる山踏を、帰れととかめん人ハしらす ワキ「愚成我誤り共云へけれ、此道替て餘処の嶺に、餘る畜類を狩給へ、山の恐れをいとひ給ひて、御身に報はん笑止さよ シテ「誠に教化ハ嬉しく候へ共、我等か動むる狩業ハ、只遊民の所作にてもなく世事の為共成そかし ワキ上へそもや殺生山ノ野をかり、世事成とハいか成故そ、子細のあらハ語り給へ シテ「惣して狩つりなとくゝいふハ、倭朝より猶異国にして、国の政の第一とせり、春々夏秋々冬四時の狩とて、春ハ獣の大小を撰ミ、若きを助け孕めるを殺さず、是を蒐とも申なり、又夏ハ獸出て、田島の苗をそこなふゆへ、上へ是を払はん為に狩するを蒐と申そかし 上同へ秋ハ陰氣肅殺の、

時節なれば百敷や、大官人も梓弓、矢猛心を頭ハして、時に随ひ狩暮す、せんと是を名付たり、冬ハ又耕作の、妨げもなく同事も、根に還る隙なれば、其数々の獣の、品を撰す獵と成、是を狩と申なり
 ワキ詞「実も委物語猶く語聞給へ、クリ上同へ夫狩と申ハ、唯秋の楽ミならず、天下万物の非情を正し治る世にも干戈を捨す、弓馬忘ぬ留なれば、遊民の業とハ、云難し、サシ上へ然に天子行幸有、観覧の折にハ狩場を定め、同へあたりの草木を払捨て、四至の垣をなすとかや、シテ下へかくやを作りてゆうしやと名付、下同へ射手を定めせこを分、草村に火を掛けて、諸の獣を中へ、追出せり、クセ下へ天子に、みつから射給ひて、扱又次にこれをいる、又其後はかすく、の、官人品により竹の、鞭も添て飛駒の、足を留す乗廻り、狩ミたれし狩くらす、小成旗をあげぬれば、扱又是を射るなり、大成旗をあく時ハ、天子みつから射給へり、上へ皆是弓馬軍陣の、同へ掛引の稽古にて、其勝負の有るかや、矢目もまた品あり、左の脇より獸の、右の方へ射通すを、上殺ツと云なり、右の耳のあたりへ射通すを中といふ、左の方の股よりも、右の方へ射通すを下殺と定置たり
 上へ扱狩取し獸を、同へ上殺を以て宗廟の、神靈に奉り中殺を人にもてなし、下殺臣に給れり、角浅からぬ理を愚成事と見給ふな
 ロンギ地へ謂を聞ハ実誠、く、其ゆへ多き狩人の、殊に子細を宣ふハいか成人に座ますそ、シテ上へ今ハ何をかつむへき、我ハ誠ハ古への、上同へ山住成や此花の、シテへかつらきや高天山、木隠れて入月の、上同へ跡を借まハ立帰り、姿を見よと夕しての、神とばかりハ

一言の、主をしらすや更ハ迎かきけすやうに失給ふく、同上へ其時夜渡る月の陰、光を増かごとくにて、神の御姿頭ハれたり、後シテ上へ抑是ハ、此山の守護神、一言主の神なり、詞「昔雄略天皇の御時此山を狩せ御座します、其時頭れま、へしに、いか成者と我名を問れ此山の主と計、上へ唯一言の答により、名にそ立ける一言の、神の姿よ能見よや、上同へ山風吹落ち颯々の、く、鈴のすゝしめ時ハ過行、春の名残しハしと惜ミ、舞給ふ、マイ、上同へ神楽も既に事終り、く、猶様との、奇特を頭ハし彼客僧の、法味を受けて、今又歓喜の楽ミありと、宣ふ声ハ、虚空に残りく聞えて、跡をかくしてうせ給ふ

八幡弓

次第へ君の恵のます鏡、く、曇らぬ影を仰かん、ワキ詞「抑是ハ当今に仕へ奉る臣下なり、夫君の政道正敷ましますにより、国富民豊なり、然るに四方の国とより、色々の御調物を捧げ候、中にも当国山城国の御調物、いまた参らす候、参りて候ハ、頓て奏聞申さハやと存候、一セイ二人へ武士の、弓張月の男山、出てや君を、照すらん、ツレへ誓ひを何と石清水、深き誓そ、頼母敷、サシへ抑是ハ山城の国、八幡山の辺りに住、賤敷民にて候なり、二人へ実や治まる習とて、四方の国と残りなく、御調を運び奉る、上同へ忝も此君の、く、住給ひける宇治の里、木幡の里を余処に見て、けふみかの原泉川、衣かせ山打過て、やうく急ぎ行程に、都にはやく着に

けりく、ワキ詞「餘の国とよりハ色との御調物を備る其中に、山城国にかきり、弓と矢を捧る事いか成謂の有やらん、委語り申へし
 シテ詞「夫弓と申事ハ、天地陰陽をかたとり、四徳五行の姿也
 ツレカ、ルへされハ神の代には柔の弓、蓬の矢にて国を治め、怨敵をはらひ世を静め、ワキへ悪魔をはらふ、シテハ宝なり、上同へか程賤敷身なれ共、く、かゝる事を曰真弓、君に引れて民迄も、心の有そ、有難きく、クリ上同へ抑弓箭を以て世を治めし初め、先我朝におゐてハ応神天皇にて、おはします、サシへ然るに仁王の忝も泉后ハ、たとひ女人の身なりとも、異国へ向ハてかなふましとて、始て御鎧を召、弓箭を帶し、ミつから異国を平けおはします
 下クセへ其後宇佐の宮に移りて皇子御誕生成給ふ、すなハち、応神天皇ハ八幡宮の御事なり、威光三尊の形ちを、行教の袖にうつし此、はたの本にこめ給ふ、八重幡雲を知へにて宗廟の神と頭れ弓矢の家を守り給ふ、されハ今の御代仰くに付て愚ならず、君に引る、玉水ハ上するは下も濁らず、君とたれハ臣ハ又、いよくすなほなり、君ハ舟臣ハ水、水よく船を浮へて、臣君を仰く世に、上へ何か心ハ楯弓の、矢を万代を治めつ、又ハ仏法王法の、治まる国と成事も、弓矢の徳と覚へたり、上ロンギ地へ不思議なりとよかたくよ、く、唯人ならず覚へたり其名を名乗おはしませ、シテ上へ我名を何と石清水、深き誓ひを守らんと是迄我等来れりと、上同へ二人の者ハ程もなく、二ツの鳩と現しつ、八幡をさして飛んで行く、ワキ上カ、ルへ辱も大内ハ、八幡山にそ行幸成、ツレハ巫ハ乙女諸友に、上哥ハ花を手折て身を飾り、く、猶も奇特を見るやとて信

心を致し、祈念するく、後シテ上へ我ハ是武内タケウチの神成ルか、弓矢の家を守覽為、是迄頭れ出たるなり、上同へ万代迄も栄へ行、松をかさしの袂かな、マイ、上同へ抑四方を封する、く、三尺の劔の光ハシテ上へ怨敵の四魔を降伏し、扱法を治むる、政、上同へ扱又天津空様と、指上給ふ舞の手ハ、シテ下へ天長かれと祈りて、かなづる舞の手成へし、上同へ手を折足を上ぐるハ、シテ上へ是大日の遊舞なり、同へしゆめつ法界とかなづる舞の手成ゆへ、太平楽と名付たり、上同へ又は仏性の、軍に向ふ度毎に、陳のやふる舞なれハ、破陳楽とも名付たりく

六角堂

次第へ曇り晴行空見れハ、く、嵐そ月のしるへなれ、ワキ詞「か様に候者ハ、都六条辺に住居する者にて候、我年来のたひに心をか、年月を送り候内に、いつしか白髪ハッの形と成て候、情無常のはけしき習ひを思ひめぐらし候へハ、出離の一道シキリ頼にねかハまほしく思ひ候程に、か様の姿と成て候へ共、未実の心と成かたく候間、救世観音の大慈をあふき、六角堂に参り、出離の一道を祈ハやと存候、道行へ四方の山重なる雲も九重の、く、内長閑成春霞、立行末も遠からぬ、花を都のなかはなる、六角堂は是かとよく、詞「是ハ早六角堂にて候、御堂のかたハラに念誦して菩提の道を祈ハヤと存候、一セイシテハ衆生苦悩我苦悩、衆生安樂我安樂、有為転変の世間の相、生死流転の衆生の迷ひ、つくることなけれハ、大悲

の涙^{ナシダ}かハく事なふして、くるしき哉^ヲ「不思議やな參詣の
人しつまり夜も三更に過るかと思ふ処に、見奉れハ皇子の姿、然も
たふとき法衣を^{チヤク}着し、大悲の泪濁く時なしとハは観音の応化なる
らん、荒有難や候^{シテ}調「否観音とハ形なき声を便の渡し船、浮
世の人を救ハんと名乗てしらする徳号なり、我ハ此堂草創^スの者な
り^{ワキ上カ、ル}ハ此堂草創とハ、聖徳太子と聞なれハ、扱ハ疑なつ
草の、厩^{ウマヤド}殿皇子にてましますな、さもあれ唯今願れ給ふハ、いか
成故にてましますそ^{シテ}「我泥^{ナイオン} 洄^{サカイ}の境法王の家を出て、六趣
の衆生に形をたくへ、縁を結ひて西方に、引^{イン} 撰^{ゼツ}せんとねかへと
も、日夜に悪ハます鏡^{ミタマシイ} 上^上同^同曇^曇はれぬ日の本の、く、人の心
のいろふかく、塵にうもるゝ靈を、ミかゝハなとか其ひかり、
和^{ヤハラ}く国とならざらんと、かことにしめす哥の道、難波の芦の、ふ
しにのミく、^{シテ}調「迷ふ思ひを失ひて、実の法にかなへなん
と、願ひの筋の絶やられて、上^上ハ是迄願れ出たるなり^{ワキ上カ、ル}
不思議やな名乗給ふハ聖徳太子、宣^ウふ言葉ハ観音の、応化の法と聞
ハいかに^{シテ}調「あふおろかなりく、本迹二ツハ融通の法、観
音の聖徳太子のすかた、水誘^{ササ}ハれて波の形有^{クリ}同^同上^上風しつまり
て、水に音なし、真如ハ^{タクミ}工^グの畫師^{グハシ}のことし^{サシ}或ハ法身の理
跡にして、万法如常の理を全^{セン} 同^同上^上人ハ依正の事相と成て、頭
と物との願をあらハす形ハ、真^{マコト}のことハりより生し^{シテ}下^下理
ハ又かたちのうちにかへる、下^下同^同一切の万物何れかハ、法の外な
らん^{クセ下}春のあしたの花のいろ、秋の夕の月のかけ、うつる

心ハはかなくも、替る此世に住の江の、岸根の草のわすれずも、心
にたもつ法ならハ^{シテ}上^上色も匂ひもおのつから、同^同誠の道とし
ら菊の、きくにかきらぬ哥の道、直成^ス竹の世と共に、ふしに心の色
もそひ、車の我を忘るゝハ、たましゐをやしなひ、身をやすんずる
おしへなり^上上^上ロンギ地^地ハ実や調を聞かからに、うたふも舞も法の道誠
を悟^{サト}る嬉しやな^{シテ}上^上さとりとハ何をゆふべの月のかけ、すめ
る心のうちならハ、迷ひそもとの姿なる^上地^地迷ひも本の姿とハ、
迷ハぬ声の観世音、歌舞の姿ハ扱^{シテ}上^上迷ひもしけき声
原の、雪におしへの声立て^上地^地誰もそれとハ白鷺の、立別れつ
ゝいなば山、まつとしきかハ今こんと、宣^ウふ声も内陣に、立かくれ
させ給ひけりく、中^中入^入ワキ調「荒有難や聖徳太子我に言葉をかハ
し給ふそや、上^上猶かしこくも稲葉山、く、まつとしきかハ今こ
んと、宣^ウふ声の有難く、心をすまし念誦して、重て影向、拜まはや
く、^後シテ上^上音高き、鼓の瀧のうちはへて、楽しき御代となる、嬉
しさよ^上地^地柳ハふくむ微妙の色^上シテ^{シテ}松ハつけぬる説法の声
上^上地^地諸行無常是生滅法、是や此、行も帰るも別れハ同し、道を
たゞせる世に逢坂の、関の清水の濁りも澄て、心の花の、林に咲ハ
うたふや法の、道ならん^{マイ}シテ上^上ワカ^{ワカ}春の鶯、時鳥^上地^地秋の
の虫の音^{シテ}下^下松の嵐^上地^地さそへハひらく^{シテ}扉^トの木
葉^上地^地時雨の晴る^{シテ}上^上半月^{ナカソツ}天の月^上地^地庭の池水^{シテ}下^下水
天に有^上地^地月波にしつむ、水ものほらす観自在菩薩^{シテ}上^上観
といつは^上地^地色^{シキ}塵^{チン}の説法^{シテ}上^上音といつは^上地^地感^{カン}識^{シキ}の悟^{サト}
り、目に聞耳に水のかけ、ふかき大悲の声のミ残て、姿ハ雲に入給ふ